



第141号

2024年10月15日発行

千葉大学教育学部
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33

これからの同窓会

同窓会会長 八木雅之

(S44・3卒)



二年前(令和四年)、母校の創立百五十周年記念事業が多くの同窓生の支援を受けて無事終了した。同窓会は、新たな歴史を創るべく、第一歩を踏み出すことになる。そんな中での会長拝命、仲間の支えを頼りとして緊張感をもって、職務にあたらねばなるまい。身に余る役割だが、思いの丈を述べてみたい。

まず、挙げたいことは、同窓会の基盤でもある支部活動の充実・強化である。歴代会長も掲げておられるが、支部あつての本部なのだ。同窓生は当然のことながら各支部に所属し互いに支え合っているが、本学は他県の大学とは様相を異にする一面がある。それは他県出身者の割合が高いことだ。昔のことになるが、小生の同期は三分の二が他県出身者だった。ちなみに、令和五年度のデータを見ても、約六割に及ぶ(学務課調べ)。当然のことながら、他県出身者が本県で教壇に立つ割合も

高い。母校のお膝元に就職してくださった仲間には支部の存在は大きな力となつていくはずだ。活動を活性化させるための物心両面にわたる支援を一層充実させていきたい。もちろん、地元に戻られ、それぞれの地域で中心となつて頑張る仲間たちも多い。そのような仲間たちとの連携についても検討していきたいと思う。

二つ目は、同窓会の存在感を高める活動である。現在最も力を入れているのは、後進の教員採用選考に関わる「教職サポートルーム相談事業」である。相談員は退職された同窓生なので現場を知り尽くしており、力強いアドバイスができる。親身になって対応してくださるので相談者も安心だ。結果は数値が示している。昨年度の相談者数は延べ一四〇名に及び、相談者の九十パーセントが合格している。加えて、教員志願者向けに行っている「教員採用選考試験対策ガイダンス」「教員採

紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいきだより	4・5面
私の学園生活	7面
趣味アラカルト	8面
講義の窓から	8面
海外教育施設から	9面
近年の卒業生の動向	9面
定期総会	10面
功労者・永年勤続者の紹介	10面
令和六年度の経常予算	10面
受賞者からのメッセージ	11面
事務局より	12面
物故会員	12面
編集後記	12面

用選考試験対策セミナー」「教員採用選考試験合格者体験発表会」この三事業についても周知をしていく。また、三年生に限らず二・四年生・大学院生向けに行っていることについても周知を図り、継続した支援活動にしていきたい。同窓会としては、今後も相談員の増員、相談日数の拡大等、前向きな姿勢で後進の育成に努めていきたい。三つ目に挙げたいことは、広報活動の充実だ。現在の同窓会報がカラー化して九年、確固とした編集方針の下、充実した内容が定着し、さらに進化を遂げている。多くの会員に愛読されその評価も高い。会報を開けば、卒業から何年経っても現在の母校の様子が目の前に広がる。同じ部活で汗を流した仲間の原稿に懐かしさがよみがえる。後進の意欲溢れる文章にエールを送りたくなる。特別寄稿の記事を読めば活躍する仲間の存在を誇りに思う。同窓生の感性あふれる美術作品に思わず目を見張る。人事や慶弔の知らせに時の流れをしみじみ思う。いろいろな観点に立って読むことのできる我々の会報

は、同窓会員にとって欠かせぬ存在となつていく。以前も記したことだが、同窓会とは「同じ学校の出身者が集まった組織。また、その会合(広辞苑)である。同じ学び舎で学んだ者同士がなぜ集まるのか、原点に立って考える」と答えが出てくる。あの西千葉の緑濃いキャンパス、教授の難解な講話、講義をさぼつての学食のランチ、しどろもどろの教育実習、自分でもよくわからない卒業論、仲間と出かけたハイキング等々、一つぐらいいは「そうだった」と頷く自分がいるはずだ。それでいいのだ。

表題に対して軽薄な内容となつていくことは承知している。今の自分にはこれで精いっぱい、気楽に足を運べる同窓会でありたい。



現役若手教員による教員養成講座

特別寄稿



これからの目標

前日本ユニシス実業団バドミントン部総監督
シドニーオリンピックバドミントン団長

阿部 秀夫
(S 51・3 卒)

七十歳で馬主申請をした。金銭面でのハードルが高く、身辺調査も厳格で、失礼な質問も受けた。仕事も辞めて収入もなく、中央競馬会、地方競馬会からの連絡も無く数ヶ月が過ぎたある日、審査合格の通知が届いた。ただし、年間競走馬を所有していないと、資格が剥奪されるという厳しいものだった。調教師、厩務員、騎手、誰一人知り合いがいなかったのである。三十年間、会員制の一口馬主には入っていたが、そんなもの馬主でも何でもない。会費を払って、たまに勝つと配当が振り込まれるだけで、権利も資格も無い。馬たちの余後も知らない。鳩レースをやっている高校時代の友人を頼って、レースつながりで、田中博康さんという若手の調教師を紹介してもらった。後日聞いたのだが、トレーニングセンター近くの寿司屋で偶然、一度会っただけの絆らしい。でも、細い線が繋がった。私は、必死でその糸を手繰り寄せた。また、自らも懸命に勉強した。

新馬主の勉強会のため、宮崎の育成牧場に出かけた。そこで、初めて、色川さんという馬主の先輩(友人)ができた。会話の九十%が、私からの質問攻めだ。さぞかし、うつとうしかつただろうが、誠実に答えてくれた。その後もメールやラインで質問攻めをしたり、川崎競馬場まで彼の持馬の応援に行ったりして、付き合いは継続させてもらっている。田中調教師にも質問攻め、お願い攻めで、船橋競馬場の佐藤裕太調教師を紹介してもらった。地方競馬は、少々ハードルが低く、とてもフレンドリーだ。九十九%のアドバイスをもらい、一頭購入し預託調教をお願いしている。先日船橋競馬場でデビューし、うれし



い一着。賞金までもらえた。夢はふくらむ。ダービー、有馬記念、凱旋門賞を目指すチーム(仲間)をつくりたい。夢が目標になりつつある。十五年後かな?

話は変わる。四月に栃木県ウエイトリフティング協会会長になった。私には、全く競技経験は無い。繋がりも二つ。パリオリンピックウエイトリフティング監督の高校時代(上尾高校)の担任だった。一九八八年、ソウルオリンピックの時、勤務していた上尾でブルガリア代表チームと直前合宿をやった。会長就任後、毎週末ウエイトリフティングの大会や強化練習に参加して、勉強している。ブリスベン大会(二〇三二年)の次のオリンピック(二〇三六年)で金メダルを狙える人材(中学生)を見つけた。

そう言えば私が高校教師になり、松友・高橋(リオオリンピックバドミントン女子ダブルス 金メダル)に会ったのも、彼女たちが中学生二・三年生の時であった。これも、何かの運命かもしれない。



三十年前、ゴルフを上手になりたくて、プロに個人レッスンをお願いした。その時も半年間質問攻めだった。相手がプロなので、レッスン代はきちんと払った。二年後の日経カップ(全日本企業対抗)で、日本一になった。

インターハイチャンピオンを育成できる教員志望で、千葉大学教育学部に入學、卒業。埼玉県で、高校教諭となり、全国優勝全二十一回。その後バドミントンがオリンピック種目になったことがきっかけで、鈴木千秋氏(千葉大学理学部卒)と共に旧日本ユニシスにバドミントン企業チームを立ち上げた。

『夢を目標、そして現実に!!』という、座右の銘を成し遂げたのかな?

今から十二、三年前、バドミントンのストリングの開発、販売をする会社を立ち上げた。お陰様で順調に成長し、数年前に故郷である栃木県に工場を移転した。昨年息子に会社を任せ、少し離れた立場で見守っている。

今は、バドミントン、ゴルフから離れ、馬主、重量挙げ、クルーズ船の旅が、夢から目標になっている。まだまだ、元気で頑張る!!

新しく始めたこと



松本 健志

(S57・3卒)

習志野市

数学の教員として中学校に勤務し、さらに再任用勤務を五年続けて退職。興味があった美術について、ユーチューブで作品(実物ではないが)を観たり、美術史の解説を聴いたりする余裕ができたが、ブックオフも楽しい。かつて読んだが、今は手元になく、書店にも置かれていないものを再び手にして、懐かしく読み返している。また、昭和の有名な作家の作品で、今はあま

私の趣味



サッカーに魅せられて



高 仲 輝 夫

(S50・3卒)

長生地方

小学校時代に始めたサッカー、千葉大卒の先生との出会いがきっかけだ。中学・高校さらには大学でもサッカー部に入学した。体育会といっても国立大学なので、セレクションで有望者を採っている訳でもなく、経験者はさまざまでサッカーに魅せられた同士の集まりだった。私の大学生活もますますサッカー一色となった。教員になってからはプレイの機会は減ったが、指導者としてのかわりは今も続いている。

目には見えないものを見つけることもできる。安価だけではない良さがある。そのような中で、いちばん時間をかけているのは教材づくりである。

一昨年の四月から、中学校を併設する私立高校に非常勤講師としてお世話になっている。メールで生徒に予習の資料を配付したり、逆に生徒から「明日質問に行つていいですか」というメールがきたり、関数グラフや問題を作成するソフトを活用したり、私にとっては、新しい経験である。高校で数学の授業をすることは一つのチャレンジであった。これを趣味としたら語弊があるが、悩みつつ模索することを楽しみも感じる毎日である。

サッカーは「空き地と予測」のゲームだ。空き地を見つけ予測し、ゴールする判断力・想像力が大切だ。また、ボールを持った者が常に主役になれる。そこも魅力の一つだ。

スポーツは目的でなく手段である。人々に「元氣・感動・仲間・成長」をもたらし、心を豊かにする。

ところで、「サッカーは少年を大人にし、大人を紳士にする」は、クラマー氏の名言だ。私は、「紳士」になっているだろうか。



千葉大学教育学部の数学教室で

は、近年、時代のニーズや教育環境の変化に伴い、定員数が大きく変遷してきました。小学校コースの算数科選修の定員は、一九九四年に四十名から三十名に、二〇〇八年に二十六名に減少し、二〇一九年の学部改組後には現在の定員二十五名となりました。中学校コースの数学科教育分野も同様に、一九九四年には二十名だった定員が二〇一六年には十名となり、現在もその数が維持されています。

数学教室では、代数学、幾何学、解析学、応用数学(確率・統計)、数学教育学など、幅広い分野で専門的な授業が開講されています。また学部生に対しては、一年次の「スタートアップ実習」、二年次の「プレ実習(観察実習)」、三年次の「コア実習(本実習)」、そして四年次の「フォロー・アップ実習(事後実習)」という形で、段階的な実習を通じて教員としての実践力を養っています。

また、数学教室は大学院教育にも力を入れており、毎年数名の大学院生が数学教育専攻に進学しています。その中には、在学中に数学という学問に魅せられ、自然科学研究科

千葉大学教育学部
数学教室の歩み

教育学部教授 白川 健



(現融合理工学府)

博士後期課程へ進学した者もおります。

その大学院生は、修了後に数学者となり、運よく千葉大学教育学部に就職することができ、現在では大学教員として後進の育成に熱意をもつて取り組んでいます。他でも、千葉県教育委員会からの委託研究生や文部科学省の留学生を受け入れ、多くの教員や研究者を輩出しています。

数学教室は研究活動にも積極的で、国内外の教育・研究に携わってきました。特に、二〇一八年には日本数学教育学会第六回春期研究大会が、二〇一九年には第七十四回関東甲信静数学教育研究千葉大会が開催され、

教室の松尾七重教授や辻山洋介准教授が中心となって運営に携わりました。また、一九九七年以降、解析学に関する国内会議五件、国際会議六件が千葉大学で開催され、教室の教員がその実行委員長を務めるなど、数学の学術的会合を主催した実績もあります。



ジャカルタ日本人学校(JJS)に赴任して約四カ月になった。インドネシアのジャカルタにあり、約七百名強の児童生徒が在籍している。職員数は、日本人の教諭が、五十八名、英語の教員六名、インドネシア語六名の七十名。それに事務のスタッフ三十名で学校を運営している。さらに幼稚園部も併設されている。

朝六時三十分には職員は出勤となる。児童生徒のほとんどは、七時頃に到着するスクールバスで登校してくる。昇降口で待つ職員と児童生徒の「おはようございます」の声が響き渡り、JJSの一日がスタートする。子供たちは、とても素直で明るい。

授業中は、とても静かで、とても七百名の子供が活動しているとは思えない。

本校の特色に縦割り活動がある。その代表的な活動が、スクールバスでの登下校で上級生が下級生の世話をし、下級生が上級生を見習ながら生活していることだ。私がJJSに赴任して私が思ったことは、毎日が刺激的でワクワク

海外の教育施設から

南十字星の見える

ジャカルタ日本人学校

北根 晃一 (S61・3卒)



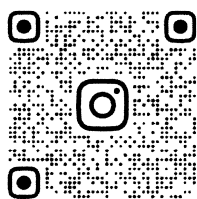
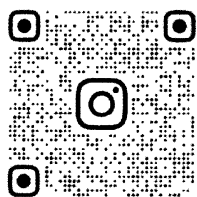
ク感があり、子供たちにとっては、学びの場であるだけでなく、オアシスでもあり貴重な場となっているということである。子供たちは、学校が大好きだ。私は、共に学べるこの時間を大切にしたいと思っている。日本にいる若い先生には、ぜひ日本を外から見てもほしいと思う。シニアになろうという先生には、まだまだあなたの力を必要としている子供たちがいることを知ってほしい。

これを書きながらこれからも南十字星がよく見えるジャカルタで頑張ろうと思っています。

本校のホームページに学校紹介のインスタグラムがあります。その中の代表的な二つのQRコードをご覧ください。

今後ともご支援とご協力をお願いします。

致します。



卒業生の動向

教員養成支援事業
学部と同窓会との連携で **成果**

近年の

- 多くの学生が教員を目指してほしい。
- 教員採用選考試験で合格率を上げたい。
- 即戦力として学校で勤務する学生を育成したい。

主に、右記の三点を目指して取り組んでいる教員養成支援事業(千葉大学教師みらい塾)は成果を上げている。

一点目は、新規事業の教育実践演習講座の成果。一年生の必修で行われ、現場の教員を招聘し、具体的事例を紹介しながら学生の意識の向上を図っている。

二点目は、相談事業の成果。相談員を五名から八名に増員、相談室を一教室から四教室に増やし、相談事業の充実に努めている。

相談件数は、選考試験受験者の八十五パーセントに伸び、相談者の九十パーセントが合格している。

卒業後の進路状況(最近5年間)

		令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
教 員	公 立 小	107	121	121	109	103
	公 立 中	37	46	43	42	46
	公 立 高	13	15	21	16	11
	その他の学校	30	26	23	21	29
教 員 外		167	152	136	137	147
進 学		29	35	35	29	33
未就職者		20	29	22	21	20
合 計		403	424	401	375	389

調査時期：令和5年度は令和6年5月1日現在、他年度の調査時期は翌年度の9月30日

三点目は、合格者を対象にした新規事業のフォローアップ講座の開設。四月から勤務する不安を払拭し、即戦力として活躍できる学生を育成する講座を行っている。令和四年の教育学部創立百五十周年を機に計画されたこの事業は、着実に成果を上げている。